

# 平行的多重構造仮説に基づく英語関係節の派性に関する研究

## On the Derivation of English Relative Clauses

### Based on the Hypothesis of Multiple Parallel Structures

プロジェクト代表者：牛江 一 裕 (教育学部・教授)

USHIE, Kazuhiro (Professor, Faculty of Education)

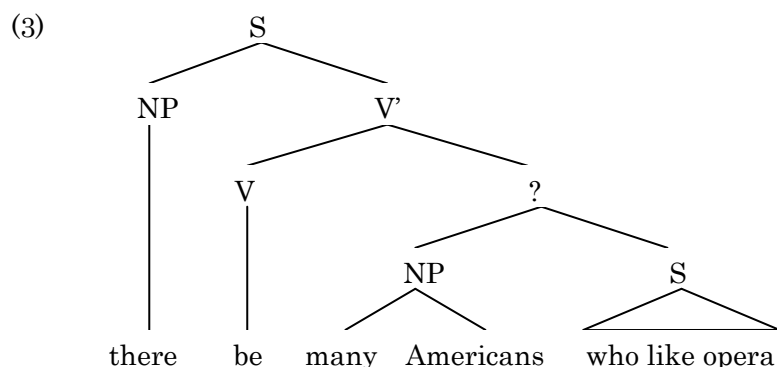
#### 1 擬似関係節

どの構文を取り上げてみてもそうであるように、関係節構文にも基本的なものとは少しずつ異なる性質を持つさまざまな変種が存在する。その一つに McCawley(1981)が擬似関係節 (pseudo-relative)と名付けたものがある。(1)での関係節は普通の制限的關係節で、many Americans who like opera で名詞句としてまとまっており、関係節はその内部で修飾部として働いている。しかし、(2)の There 構文に現れた関係節は、そのような働き方をしておらず、さまざまな点で表面上はまったく同じように見える(1)でのものとは異なる統語的・意味的性質を示す。

(1) Norman has interviewed many Americans who like opera.

(2) There are many Americans who like opera.

McCawley(1981)は、(2)の文の構造は(3)のようなものであるとする。名詞句プラス関係節の部分が等位接続できることなどから、その部分で構成素になっていると考えられるが、普通の制限的關係節とは異なり、(2)での関係節は名詞句内の修飾部として働いてはいないということになる。



#### 2 関連構文

本研究では擬似関係節とそれに関連のある次のような構文について、その特徴と発生のメカニズムについて言語習得過程との関連において考察した。

(4) Presentational Amalgam Construction (Lambrech (1988))

- a. There was a ball of fire shot up through the seats in front of me.
- b. There's a lot of people don't know that.
- c. Well, I have a friend of mine called me.

(5) *That's X is Y*-construction (Ross-Hagebaum (2004))

- a. Well that's the reason why I like both of those programs is because they're kind of based on books.
- b. And that's my big area of interest in linguistics is discourse.

(6) Double *be* construction (McConvell (1988), 牛江(2005))

- a. The only thing is, is I couldn't move down here because I don't drive.
- b. The problem is, is that we can't find the evidence.

- (7) Apo koinous (Lambrecht (2006))
- a. [He's got half his leg] [is weightless].
  - b. [It's the university] [get the statement].
- (8) Pseudo-modifiers (Declerck (1981), 関 (2001))
- What was the noise? — It was John who broke the glass.

### 3 関係節の発達

なぜ上記のような構文が存在し、なぜどの構文においても *is* という形での *be* 動詞が深く関わっているのか。それは言語習得における関係節の発達過程で起こっていることが反映していると考えられる。

関係節の習得において最初に出てくるのは、**presentational construction** において、**Copula 節**のあとに自動詞を含んで主語が関係詞化したものである。そのような実質的に一つの節で一つの **situation** を表すものから始まり、徐々に他動詞を含むより複雑なものに拡張していき、最終的には完全に2つの節で2つの **situation** を表すようになる。そして、最初期のものには **relativizer** なしのもの頻度が高く、**That's, Here's, There's, What's** などの後に **NP** プラス **VP** という形で現れる。**(presentational) marker** として働く要素の後ろに現れる **NP+VP** の形から、その間にまず **that** が挿入された形が使われ、その後 **wh-**がその位置で使えるようになる。(4)のような現象は関係詞の省略ではなく、(2)のような文は関係詞が挿入されて派生されたものであるかもしれない。

関係節が上述のところからまず発達することには、それが促されるさまざまな理由があるが、子どもにとっても大人にとっても、**Amalgam Construction** を使う意味的・語用論的な動機付けがあると考えられ、大人の文法での擬似関係節等の派性に言語習得の過程で起こったことが深く関係している可能性がある。

なぜ *is* なのかに関しては、最初期の段階で **There is, That's, Here is, This is, It is** など **presentational marker** としてまとめて働く表現の中に *is* が含まれていたからではないか。これらの表現は最初の段階では分析的には捉えられず全体としてある **marker** として働いている。それらの **formula** としての表現が分析的に考えられるようになり **PRO** と *is* に分解されて捉えられたとき、*is* が **marker** そのものように考えられた可能性があり、それが後の段階でのさまざまな「構文」において *is* が現れてくる要因の一つになっている。

### 4 動的文法理論と平行的多重構造

本研究では擬似関係節から初めて、大きく関係節・分裂文全体を含む大きなグループについて、言語習得過程で起こることを通じて互いにある関係で結びついている、子供の言語習得においてその構文の初期段階で起こったことが、大人の文法の様々な部分に影響を及ぼしていること、しかも、そこには基本的なものから派生的な変種へという拡張の関係があることを指摘した。

また、本研究を通して **Kajita(1977)**以来研究が進められている動的文法理論の考え方に対して、言語獲得の過程で先に現れたものが、それより後になって現れたものよりも、大人の文法の観点から見れば必ずしも基本的なものとは言えない、という新しい視点を付け加える必要があることを示唆した。

さらに、**Ushie(1994)**以来提唱している、文がその統語構造として（派生の段階・レベルとしてではなく）複数の構造を同時平行的に持ち、それらの構造が相互に影響を及ぼしあうという平行的多重構造仮説との関連において、多重的な統語構造がどのようなメカニズムで派生されるのかに関して、言語習得過程が大きく関わっていることを明らかにした。